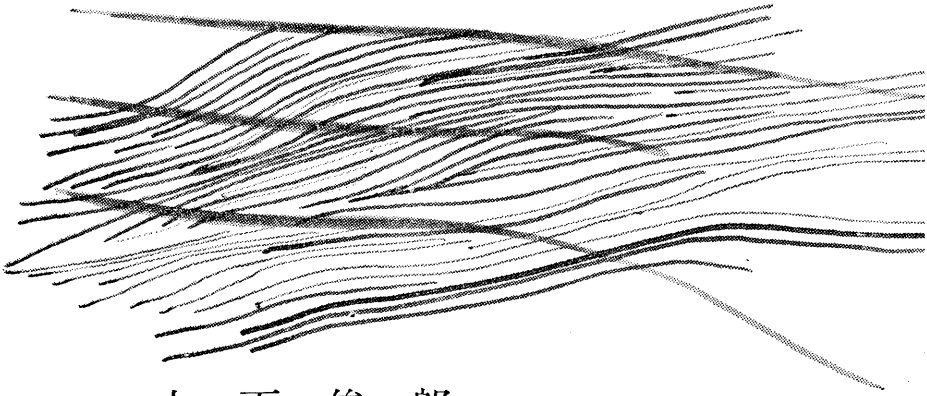
創刊八十周年記念

連載インタビュー



山下俊郎

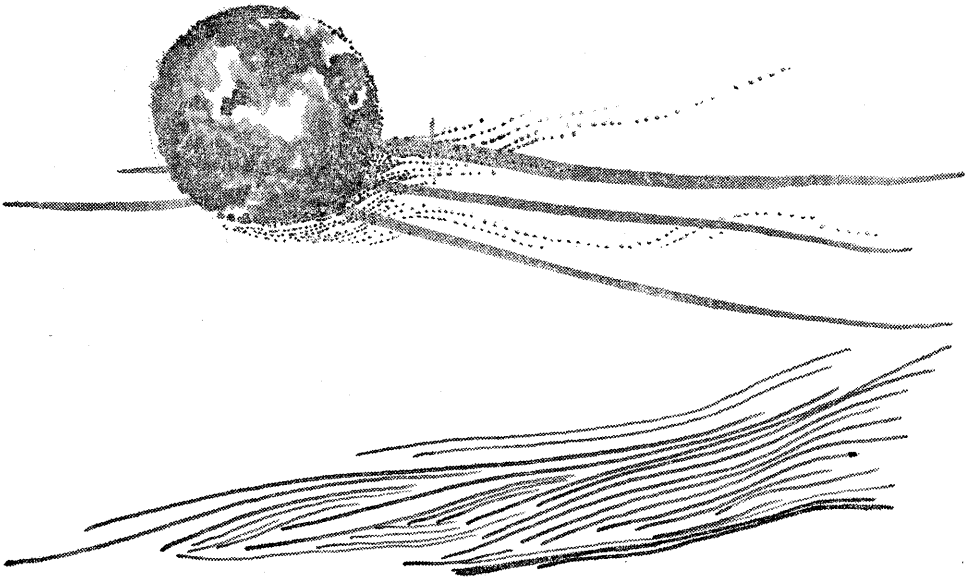
《聞き手》　立川多恵子

立川　お顔を拝見すると、明治三十六年生れとは申し上げられないような先生です(笑)。明治三十六年というと、私の父とちょうど同じです。私にとっては、同じ世代を同じように生きた方……単なるインタビュアーじゃなくて、人間として興味を抱いています。父から学べなかったことも先生に教えていただけるかな、と期待しています。私共の学校の坂元彦太郎先生もその御年齢になられて……。

山下　ええ、いっしょですよ。よく話が合うんです。郷里が割に近いものですからね。私は薩摩の方ですけどね、先生は同じ島津藩下なんですよ。

立川　鹿児島というところは、偉い方の出るところですね、森有礼とか……。どうして鹿児島が教育に熱心なのでしょうか。

山下　昔は、長野県と並んで教育県でしてね。私の父はずっと教師でしたが、あの頃、長野県と鹿児島県の教員を交換しまして、交換留学をやったことがあったそうです。NHK大河ドラマの『獅子の時代』じゃないけれど、あそこは離れ島ですからね。離れていて文化的には中央とは隔絶していたんだけれど、あそこに独特の文化を開いて。結局、島津斉彬が文化に明るい人で、船を造るとか、写真を写すとか、ギヤマンを作るとか、進歩的なものがあった



児童研究と保育（2）

んですね。

立川　もう一つおもしろいことに、男性の天国ですね。

山下　ええ、そうなんですよ。鹿児島では男が威張っていて、母親といえども男の子の枕元を歩いちゃならない、だから裾の方を廻る。洗面だらいでもね、昔は足のついた長いたらいに水を汲んで洗ったものだけれど、そういうものでも、男物と女物とちゃんと区別している。それから、物干し棹もみんな区別してある。そして、男物の干してある脇を女は通っちゃいけなくてよけて通る、そういう時代だったんですね。

立川　武士階級がきちっとしてたのですか。

山下　そうです。今の差別撤廃からいうとよくないことかもしれませんが、士族というのが非常に誇りを持っていたんですね。自伝の『生い立ちの記』の中に書いておいたんだけれど、私の母の母、つまり、祖母は鹿児島の郡部の出身なんです。それがある時いっしょに歩いていて、前を歩いていたおばさんが抱っこしていた子どもの草履が、片っぽ落っこったんです。それを、私が拾ってやった。そしたら祖母にひどくしかられたんです。士族の息子たるものが、他人の履き物を拾うとは何たることだって、

おこられてね。学校では普段先生が、他人には親切にしなくてはいけないといわれるので、その通りに実践して得意になっていたのに、どうもおばあちゃんの考えは違うらしいな、と不思議に思ったことがあるんです。祖母は、熊本に近い方の、薩摩の北の端の村の出身なんですけど。そして、母の父というのは、その村出の文化的指導者だったらしいんです。だから母は熊本の女学校に行きました。

幼年時代

立川　先生の自伝を拝見しておりますと、先生は、ほんとうに順調な道をお歩きになって、期待通りりっぱなお仕事をなさる学者になられた。先生は、ほんとうに優等生でいらして、しかしきょう伺ったら、先生の子ども時代のいたずらだの、ワンパクだのの思い出を伺えないかと思いまして(笑)。

山下　私自身、振り返ってみて、ほんとうに幸せな生い立ちをしてきたと思います。ただし中学に入ってから、父親が病気しまして、私も大分いやな思いをしたんですけれどね。ただ家では、私が長男で、下はみんな女の姉妹でしたから……非常に妹の面倒見もよかったんですよ。

立川　女の子の中のたった一人の男の子で、あまり乱暴するようなことがなかったんでしょうね。

山下　ええ、割になかったですね。そして、私は体が小さかったんです。現在は、私の年齢層でいえば、大きい方ですけど。中学時代、一年間に十センチずつのびて、三年から五年の間に一尺のびたんですよ。中学一年の時の身体検査の記録があるので、この間、調べてみましたら、一年の一学期の身体検査で、昔の寸法で四尺三寸いくらか、メートルに換算するとね、百三十何センチ。それを今の学童の身体発達と比べると、九歳。中学一年だと十二歳でしょ、三歳下だったんですね。だからとても小さくて、かわいがられたんです。今、おかしな話しますけれどね、鹿児島は昔、藩の方針として女色というものを禁じたんです。そのかわり、男色が流行ってね。それで、稚児さんというものがあって、私はいろんな人に、稚児さんになれ、と申し込まれましたけどね(笑)。

立川　そういう少年が、近所の子どもと棒を持って暴れるということは考えられないですね。

山下　棒を持って暴れるなんてことはありませんでしたけれどね。気は強い方でしたからね。理屈に合わないことがあると、徹底的にがんばったんですね。六年生の時の学芸会の開会の辞を述べる時にもね、先生に食って掛かったりしました。そういう反骨精神は小さい時から持っていたんです。正しいことはどこまでもがんばる、これは今に至るまでそうですけどね。

立川　最近、ワンパクでないと大物になれないようによくいわれますけど、現象面ではワンパクでなくとも、内面で根性が育つということが大切なのですね。先生の自伝を見ると、「女の子に好かれていた」と書いてありました。

山下　ええ、自分では、妹ばかりだった

でしょう、だから女の子を扱う術を自然に身につけていたんじゃないかと思う。

立川　先生、「お医者さんごっこもしました」と書いてらして、やっぱりちゃんといろいろなことをして遊んでいらしたんだなぁと(笑)。私は、先生のお姿を見て、論語か何か読んで、袴をはいてきちっとしてらっしゃるようにしか想像してなかったんですけど。それから、どこかにいらした時でしょうか、馬車の窓から見た青い月の光が、今でも私の中に残っている、そういうようなことをお書きになっていて、私、非常に繊細な感受性をお持ちの方なんだな、と思いました。そういう小さい時のことが「眼底に残っている」というようなことを、先生はいくつも持っていらっしゃる。そういうものは、成長してから、どういう形で人間の中に位置づくんでしょうか。

山下　そういうものが内で育って、周りを見る目というものが、それを土台として、育ってくるんだと思うんですよ。

立川　感動が人間の心を育て、新たな環境をとらえる目を育てるのでしょうね。それから思ったのは、先生の自伝の中でうれしい「ぬくもりが残っている」という表現です。

山下　ええ、女の先生に手をつないでもらった……(笑)。

立川　何年前でしょうね。

山下　もう、七十年前ですよ、ハハ…。

立川　そういうものが、理屈でなく、人間をどこかでふくらましたり、豊かにしているんじゃないかなぁと思いました。ほんとに、幼い時の思い出を大事にしていらして……。

山下　何遍か「思い出の記」を書きましたからね。中学時代に書いた「思い出の記」があったんですけれど、今度一所懸命捜してみたんですが、どこへいったのか、なくなってしまって。中学時代の夏休みの作文の宿題か何かで、「生い立ちの記」を書け、とかいうのがあって、書いたことがあるんですけれどね。幼児時代の思い出なんかも、もう何回か書いているんです。蟹の話が書いてあったでしょ。あの話なんか、もう何遍書いたかわからないけれど、自分にとっては、印象深くて懐しい思い出なもんですからね。

立川　教生の話の中で、今の実習生と違うところがある、とおっしゃっていらっしゃいます、その辺は何かしらと思うんですけど。

山下　結局、昔の師範教育というのは、人格的に堅すぎるとか歪(いびつ)とか、ねじれた姿の教育者像が連想されていて、それを師範タイプといっていたんですけれど。日露戦争があって、第一次世界大戦後の不況が来て、その頃になると、勉強したい者でも金がないと上の学校に行けなかった。そしてそういう者が師範に行くことが多かったわけです。

立川　そこで先生の小さい時に教生になった人たちは、知能的にももちろんですが、人格的にもすぐれた人が、師範という場を借りて勉強したということでしょうね。

山下　昔の教生という人たちはね、ほんとうに生徒をかわいがってくれましたよ。それから、教育者としての使命感というも

のを、師範学校にいる間に植えつけられていた。教育実習へ行くのは最高学年ですからね、それまで教育者としての使命感をたたきこまれて、そうして生徒と接してくれていたのでね。今の教生というのは、私も受け持っているけれど、やっぱり、一所懸命使命感を持って教育実習をするというのには、ほど遠いような気がするんです。

思春期

立川　先生は、思春期にはご苦労なさったそうですね。

山下　ええ、父は昔でいう神経衰弱、今でいうノイローゼですけど。それで一時、静養しました。また復職した時には、前にいた学校よりもぐっと格の低い学校の校長にさせられて、思うようにいかなくって。私が一高に入ったら、一緒について出て来ちゃってね。東京の小学校の校長をいくつかやったんです。鹿児島の部下を連れてきてやったんです。ところが、東京の教育に合わない教師がいたりして、問題を起こして、結局、東京の小学校を引責辞職しましてね。その後は隠居して、私立の女学校の国語や地理やらを教えて、余生を送ったんです。

幼児期、小学校時代は、ほんとうに幸せだったと思うんです。家でも学校でもかわいがられて、友達にも、少しは意地悪なのもいましたけれど、あまりいじめられなくて、非常に豊かに育ったと思うんです。ところが、中学に入るとそういうことがあって……。ただ中学時代、非常にいい先生が担任になって下さって、その先生にいろいろ悩みを打ち明けて相談にのってもらったんです。私の通った中学というのは、今考えると、当時としては非常にすばらしい中学だったんです。というのは、中学一、二年に音楽があったんですよ。昔は、中学には音楽はなかったんです。東京の音楽学校（今の芸大）を出た若い先生が一年間教えて、おやめになって、また新しい先生が来られて。音楽といっても唱歌ですけれど、県下唯一の中学でした。それから英語がね、外人の女の先生でね。中学生から見るとおばさんでしたけれど(笑)、まだ二十代の年齢だったんでしょう、ご婦人の先生ですよ。よく外人はやりますけれど、歌を歌いながら教えるんですよ。ディキシーランドとか、第一次世界大戦の後、流行ったような歌を教えてくれました。そういうようなことは、私の中学だけでした。

立川　先生が高等学校（旧）をお選びになる時は、文科系がお好きだったんですか。

山下　それがどういうものか、学科では数学が好きだったんですね。試験があると、大体百点でね。だから、友達はみんな、理科に行くと思っとったらしいですけど。私が心理学なんていうものを選んだのも、そういう理科的な素養があったからで、今では心理学は自然科学ですからね。私は心理学を選びましたけれど、父や周りの人は法科に行けと。数学ができるということは、ものごとを論理的に考えるという頭なんだから、役人になればえらく出世する、といわれたんです。

立川　当時心理学を専攻される方は、珍

らしかったでしょうね。

山下　大正十四年の私の入った年から、東大の心理の定員が十五人になって、ぴったり十五人いたんです。ところが、満足に卒業したのは七人しかいなくて、その七人の中に、牛島義友君だとか波多野完治君とか大場千秋君という連中がいました。

立川　現役の方たちの最長老ですね。

山下　おもしろいことに、十五人のうち五人が一高で、しかも文科から行ったのは、私と波多野君の二人だけでした。おそらく私の年が初めてでしょうね。理科から多く入ったというのは。

立川　まだ哲学科の心理の時期ですね。東大の心理が大学の中に確立した時期、と考えていいですか。

山下　ちょうど高等校学の時、日本の心理学の先達の速水先生がいらして、その方の心理学の講義が非常におもしろかったことが、一番の大きな刺激でした。

私が大学への進路を選ぶ時、哲学をやるか、高等学校でドイツ語をやっていたのでドイツ文学をやるか、どっちにしようか迷って考えているうちに、数学が得意だったし、心理学に興味もあるし、そういうものを満足させながら、かつ哲学的な思考もできるし、文学的な面もあるし、速水先生の影響もあって、心理学にしたんです。私の中学時代、鹿児島では軍人になることが大事だったんです。それで私もはじめ海軍兵学校に入ろうと思っていたんですが、体が弱くてだめで。鹿児島にも高等学校がありましたが、いわば田舎でいやに威張っているというような感じがあって、私が見るとどうもよくない、外に出よう、どうせ外に出るなら天下の一高に行こう、というわけで行ったんです。

卒業後

立川　ご自分の大好きな学問に打ち込もうというところが、その当時の常識的な男の人達とは違っていたと思うんですが、結局、心理を出ても、就職が容易ではない時期ですね。

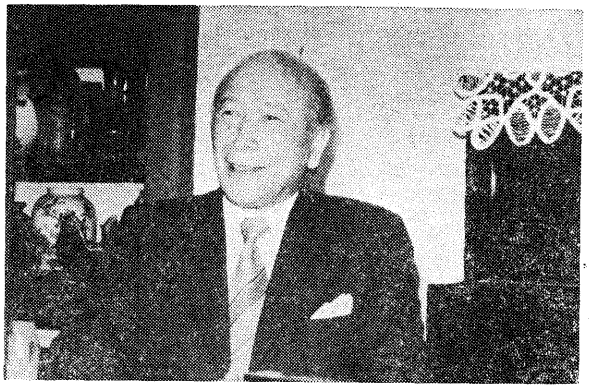
山下　ええ、私の年から不景気になりましてね。私はすぐ、航空研究所に入れましたので一番運が良い方だったんです。

立川　先生は色彩に興味を持たれていたそうですが、これはどういうことからですか。

山下　前から知覚に興味を持っていたものですからね。我々の頃は、とにかくたくさん文献を読みましたからね、研究室にある心理学の雑誌や本を読んで、そこから色彩に興味を持ったんです。色彩というと、物理学や生理学にはありますけれど、私の読んだ文献の中に、心理学的な色彩学というものが出てきたんですよ。カッツという学者が、『色彩の現われ方』という本を書いてまして、それが心理学的なものなんですね。たとえば、赤系統の色は浮き出て見えるし、青系統の色は引っこんで見えるんです。進出色、後退色っていうんですけどね。それを研究して卒論を書いたんです。

立川　それらの研究は外国ではすでに相当進んでいたんでしょうねぇ。

山下　ええ。ですから、卒論を書く時は、そういう外国の文献全部調べまして、



やました　としお氏

その結果から、自分はこういう実験をやろうという計画をたて、色を窓から見せて、滑車をつけておいて、同じに見えるところまで置け、ということをやったんです。

立川　そういう装置も先生がお作りになって。

山下　ええ、我々の頃は、そういうものは全部手作りでしたから。大工さんの仕事もやるし、電気屋の仕事もやるし(笑)。

立川　航空心理とは、そういうところからつながったんですね。

山下　知覚のことをやっていたもんですから、先生から君やらないか、といわれましてね。私が第一にやらされたのは、予科練の少年航空兵の適性検査の下準備でした。

立川　先生は、そこではあまり長居をなさらずに、すぐに子どものことにお移りになったようですね。

山下　ええ、航空関係は二年ぐらいにして、子どもの研究に興味が移っちゃって。子どものことの方が、教育的なことの方が、自分のやるべきことだと、そういう気になったんです。そのきっかけには、自分の子どもが生まれたということが一つあるんです。

立川　亡くなった奥様とは、卒業してすぐご結婚なさったんですか。

山下　ええ、子どもの時からの幼な友達でね、クラスメートの妹ですよ。

立川　そして、家庭教育相談所においでになった……。

山下　これは文部省の外郭団体で、大日本連合婦人会というのがありましてね、青木誠四郎先生が、君こういう仕事をやるから手伝えということで、子ども達にテストをやったんです。心理学者だけじゃだめだから、精神医学か小児医学をやれる人として、脳外科を東大で始めた清水健太郎君と、青木先生と三人で相談を始めたんです。

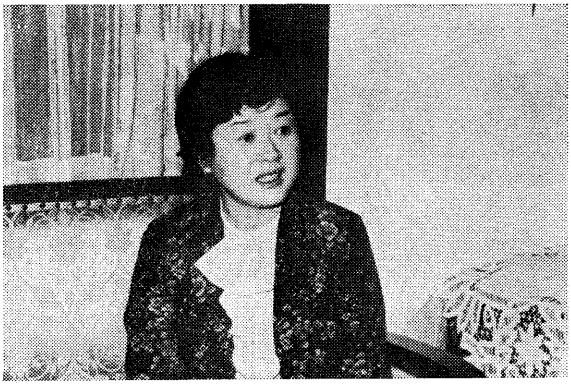
立川　それはどこにあったんですか。

山下　昔、女高師のあったお茶の水の焼け跡にバラックがありましてね、そこに文部省分室というのがあったんです。そのバラックで、大日本婦人連合会の家庭教育相談所をやっていたんです。

立川　その頃のケースは、どんなものが多かったんですか。

山下　やはり、学校のできが悪い、ひねくれてるとか、反抗するとかね。我々から見れば、発達に伴っているというようなも

のがね。勉強ができないというようなことともね――お医者さんがいっしょにやらなければだめだ、ということの例によく引くんですけど――清水君は、当時精神科の教室にいたんですけど、小児科のこともやっていて、診てもらったら、結局乱視の子でね、早速眼科の専門家にまわしてやったら、次の学期から非常にいい成績になったというのが、私の記憶にまざまざと残っているんです。心身を総合的に考えなくちゃだめです。



たちかわ　たえこ氏

『一人っ子の研究』

立川　先生の『一人っ子の研究』の動機は、何でしょうか。

山下　ドイツの教育心理学の専門雑誌を研究室で読んでいましたら、一人っ子のことが出ていましてね。一人っ子の置かれている環境は、思春期の子が置かれている心的環境と似たようなものだ、というおもしろい論文があったんです。特に自分の子どもが生まれた時でしたからね。当時、私は現代の人の考え方を先取りしていたのでね。お話ししますと――私の母は何人子どもを産んだのかな(数えて)八人は産んだんですね。たくさん産んで死なせちゃうからだめで、子どもは少なく産んでよく育てなくては、と思ってね。当時、卒業したてで貧乏学者でしたから。子どもはたくさん産むまいと。あの頃、サンガー夫人という人がね、産児調節を普及の為に日本に来ていたんですが、そういうこともあり、一人であるべきか、もう一人産んでやるべきか、という自分のぶつかった実際の問題もあってね。それで一人っ子はだめだってことで、もう一人産みましたけどね。その後は戦争にかかったから、とても子どもなんか育てられないと思ってやめたんですけど。

立川　科学的に、その当時から家族計画を考えてらしたんですね。当時は、いくらサンガー夫人が来ても、産児制限なんて口にも出せない時代だったそうですが。

山下　私の母なんか、自分がたくさん産んでいるもんですから、そんな子どもを産むなんてこと、自分勝手にできるもんじゃないっていってましたよ。私は私の一番下の妹と二十二違うんですよ。私が大学時代に妹が生まれたんです。だからもう、自分の子どもみたいで、膝にのっけて遊ばせてやったりしたんですけど。

立川　先生のご研究は、一人っ子が悪い

というのではなく、結局、環境の問題である、という基本線は、現代に通じるんですよね。

山下　ええ。一人っ子だからだめだ、という烙印を押すのは、大変なまちがいで、一人っ子だってちゃんと育てればりっぱに成長するんだということを、特に一人っ子の親に知らせたいということと、もう一つは、一人っ子を育てる、育て方の基本になることは、他の一般の子どもにも共通していることなんだ、ということを頭の中に置いて研究しているんです。

立川　その頃、愛育会ができてきたんですね。

山下　愛育会というのは、皇太子がお生まれになった記念に、当時の金では大金ですけど、七十五万円御下賜金をいただいたんです。そして、三井、三菱などの財閥から同額の寄付を募って、百五十万円の資金で愛育会を創ったんです。母性並びに乳幼児の教化並びに養護に関する事業の資金にせよ、という御沙汰だったのです。愛育会ができたのは昭和九年ですが、私が直接仕事に関与したのは、昭和十一年からです。一方で研究所を創るという仕事をしながら、一方で方々で児童相談をやったんです。愛育研究所教養部の仕事は私が引き受けて、研究所の設備などは全部、私が準備したんです。

立川　保健部もあったようですね。相談所時代のご経験から、教育と医学との両輪でなくてはいけない、ということだったんですね。

山下　ええ、両方でね、総合的に母子の問題を考えなきゃいけない、ということでね。当時としては、新しいものだったんです。

立川　戦争（日華事変）に駆り立てられていく時期ですよね。

山下　当時、環境の研究をしてましてね、兄弟の数と知能の発達というのを調べて、それで見ると、子どもの数が多いと知能が良くないと、そういう結果が出たんです。それを、当時人口問題研究会というのがありましてね、今の厚生省の人口問題研究所の前身です、そこに出て話をしましたら、読売新聞の記者が興味を持ちまして、それが新聞に出たら、初代の理事長だった関屋貞六郎さんに呼びつけられてね、「生めよ増やせよ」という時代でしたから、そんな国賊みたないこと書いちゃだめじゃないかってね。

立川　先生の一人っ子のご研究でも、中流階級以上と以下とが違っていて、上の方はたくさんいてもいいけれど、下の方は一人っ子の方がいい、というようなことをお書きになっていらっしゃいますね。

山下　子どもの数からいうと、ドイツの研究ですが、三人から四人がいいということになっていたんですね。

環境の問題

立川　先生は、一人っ子の問題の研究からスタートして、環境の問題に興味を持たれたようですね。そして先生が、いわゆる物的環境だけでなく、人的環境を主張なさったのも、この時期ですか。

山下　ええ、そうです。

立川　そして、それがやがて保育の問題に移っていくわけですね。愛育会の研究所を確立された頃でしょうか、用箸運動の研究をなさって、これは生活習慣の研究の発展ですか。

山下　ええ。ちょうど同じ時期に、私の尊敬しているゲゼルが、アメリカで、カップの持ち方とかスプーンの使い方を研究しているんですよ。戦争が終わって、それを見て、ああ平行してやっていたんだなと、非常な喜びを感じましたよ。ですから、戦後ゲゼルの著書を翻訳するにあたって、手紙のやりとりをしました。ゲゼルさんがエール大学を引退されてつくられたゲゼル研究所に、去年の夏はじめて行ってきましたよ。

立川　先生は、ゲゼル先生とは文献の上では早くから出会っていらっしゃるのですね。

山下　ええ、手紙で交渉したのは、戦後です。会ったことは一遍もないんです。映画を映して記録したものを分析するという研究方法は、ゲゼルが開拓した道でね、それを私は教わってやったんですよ。ゲゼルの研究に出会ったのは、一九二五年で、その頃は写真を使っていたんですけど、その後、戦前から映画を使うようになったんです。私が用箸運動の研究を最初に発表したのが、九州で開かれた日本心理学会の大会で、昭和十六年の秋です。十一月だったかな。その年の十二月に、戦争が始まったんです。

立川　先生は、他にも映画にお撮りになったものがあるんですか。

山下　いいえ、他にはありません。当時でいえば、フィルムをたくさん使った贅沢な研究で、研究所だったからできたんであって、個人ではできませんね。

立川　先生が基本的生活習慣の研究をお始めになったのは、いろいろな相談を受けて、標準というものを知っておきたくてなさったわけですね。

山下　相談に来るのが、学校のできが悪いとか知能が低いんじゃないかとか、あんまり知的なものばかりでね。私は、生活そのものを下から築き上げていくのでなくては、それが人格形式の基礎になるのだから、という考えで基本的生活習慣の研究を始めたんです。そのためには、スタンダードをつくらなきゃいけない、そう思って見ると、一九二五年のゲゼルのテストにも飛び飛びに出てはいますが、具体的な、個々のことについて書いたものはないんですよ。これは自分がやらなきゃいけないと思って、やったんです。これをやり始めたのは、大学の研究室にいる頃でしたけど、やはり毎日新聞の記者が興味を持って載せてくれました。

立川　母親達は主知主義で、生活を二の次にしているからと……。

山下　ええ、主知主義的教育を私が排するという意味は、そこにあるんですけどね。特に幼児の場合、早くから字を教えるとか、数を教えるとか、この頃いわれてますけど、非常に大きな問題だと思いますね。

立川　先生は、相談事業を通して、早期自立の大切さを教えられたわけですね。

山下　ええ。自分のことを自分でやる

と、偉くなったような気がするんですよね。私は、幼い時から着物をたたむのでもボタンをつけるのでも、自分でやりました。鹿児島では当時男の子が大事にされていましたから、男の子にあんなことさせてると、母は近所のおばさん達から悪口いわれたそうですけど、それが母の賢明なところだったと思うんです。ズボンをプレスするのでも、自分でやったものですよ。ですから、ズボンはこうやってプレスするものだと、結婚してから家内に教えてやったんですよ(笑)。

立川　私ども、標準ということで気にかかるのは、こういうことができなきゃいけないって考えてしまう、標準に近づけなきゃという焦りがあるんですね。

山下　ええ、それは非常に危険なことなんですね。それは考え方にあるんでね、標準というのは一つのものさしにすぎないので、一人一人の子どもは違うんだから、違っていいんだけれど、一応目安としてあるんだと、いつもいっているんですけどね。私が考えるのに、今のおかあさん達にそういう考え方があるのは、明治以来の主知主義的な教育の残りで、ある一定のところまで届かなきゃいけない、百点満点で八十点九十点はいかなきゃいけない、七十五点ならまあよかろう、というような考えと重なってくるんじゃないかという気がしますね。

立川　先生のご研究は、文化を伝えるということも、子どもの自然は成長発達を無視してはいけない、それで先生は、片方では基本的生活習慣のことをおやりになり、片方では発達段階をおさえていった。二つが一つになることが大事だとお考えになったわけですね。

山下　ええ、おっしゃる通りです。

倉橋先生

立川　倉橋先生との出会いは何時頃ですか。

山下　先程申しました文部省の外郭団体の大日本連合婦人会で家庭教育相談所を始めた時にね、倉橋先生が社会教育局の視学官みたいなものを兼任してらしたでしょ、その時、心理学の大先輩の倉橋先生ですと紹介されて、お話しした記憶があります。それが最初の出会いで、おそらく昭和六年のことだと思います。その後、直接出会える機会がなかったんですけど、私が親しくお話しできたのは、戦後保育要領をつくる時ですね。それから、日本保育学会を創った時ですね。ただ私が小金井で、先生が中野にお住まいでしたから、よくお寄りしてお話ししましたけれど。倉橋先生は、三十年前に僕が言っていたことが、今ようやくみんなにわかってもらえるようになったよ、というようなことを言ってらっしゃいました。倉橋先生は、僕は詩人だからねっていってらして、私は科学至上主義ですから、くい違うところがなかったわけでもないんですが、非常によくわかって下さいましてね。保育要領をつくる時でも、発達段階というのは日本になかったし、外国の文献なども利用してつくって、そんな時にもいろんな話をしたんです。終戦直後から『幼児の教育』の編集をおやりになるにつ

いて、編集協力委員というのをつくって、その内の一人に私がなったわけです。

立川　保育要領は、倉橋先生が委員長か何かで……。

山下　名前は出ませんでしたけれど、まとめ役は倉橋先生がなさってね。私が心理学者で、内藤寿七郎さんが小児医学者で、二人をCIEのヘレン・ヘファナン女史が高く評価して、何でも内藤、山下でしたけどね。

立川　保育要領の後で、幼稚園教育要領が出たわけですけど。

山下　ええ、保育要領の精神がすっかり塗りつぶされてしまって、なくなってしまっているんです。幼児保育が悪い方向にいってるといってるんですよ。

立川　いわゆる六領域を生んだ部分については、どのようにお考えですか。

山下　六領域というのは、昔の五項目時代に逆戻りしたという弊害があると思います。小学校の教科と同じように考えられる、という誤解の上に幼児教育が組み立てられていく危険がある、けしからんっていってるんですよ。

立川　終戦後しばらくは、小学校にもいわゆる体験主義が尊重されていたのが、どうもエッセンシャル・ミニマム的な基礎が押さえられなかった、そこで基礎を押さえようというので小学校教育がたて直された、と同時に、それが下ろされた形で幼稚園教育を組織的にしたということらしいですね。

山下　前の五項目時代にね、地方に行ってみると、小学校の時間割みたいに、観察の時間とか談話の時間とかあったものですよ。

立川　それが今でもどこかに行くとあるんですよ。でも近頃は、大分具体的、総合的という面が強調され、時間割的考え方は消えつつありますけれど。

山下　ええ、でもあれは相当罪が深いですよ。そう、それから、倉橋先生との出会いでね、愛育研究所がスタートした頃、昭和十三年にね、倉橋先生は愛育研究所の顧問をなさってたんですよ。それで、ほとんど毎週土曜日には、研究の話し合いや相談をする会があって、そこに必らず来て下さってね、話をして下さったんですよ。お話がお上手ですから、みんな楽しみにしていたもんですよ。

日本保育学会発足

立川　日本保育学会も先生が産みの親でいらっしゃいますね……。

山下　あれは、倉橋先生が非常に熱心におやりになったんです。私は、科学主義合理主義の方ですから、保育を科学的な基礎の上にのっけなければ進歩しないと。戦前に、保育問題研究会というのを城戸幡太郎先生がおやりになっていて、それの有力なメンバーの一人として、私が入っていたんです。それを進めていたところが、城戸先生が弾圧を受けて獄中の人におなりになったわけです。それで、保育問題研究会は解散して、日本保育研究会という名でオフィスを愛育研究所の中に持ってきて、ささやかにやってたんです。終戦になってから。私は日本保育研究会の仕事として、出張講

座を開いたんです。郊外の幼稚園に行って、近隣の幼稚園保育所の保育者達を集めて話をしてたんです。倉橋先生はそういうことを耳にされて、保育要領をつくる時に私が発達段階で苦労して、それは日本の保育研究が不足しているからだと。そして直接には、アメリカの使節団に進言するというお仕事をなさったんです。それをなさるのにバックアップがなきゃいけない、バックアップには科学的研究でなくてはいけないから、アカデミーっていう名前を使おうじゃないかというんでね、アカデミーという名前で向うに進言したんです。そういったからには君、やらなきゃだめだ、日本でも学会をつくろうとおっしゃったんで、その使い走り役を私がやったんです。倉橋先生に報告をしながら、基礎づくりをやりましてね。昭和二十三年の九月十八日に、在京の教育学者それから心理学者……奇妙なことに、まともに幼児教育やる人は、教育学者の中には少なくてね、心理学者が多かったんですよ。十数人の研究者に集まってもらって、保育学会っていうのを創ろうと思っているんだと相談すると、その人達が早速賛成したものですから、十一月の二十三日だったと思うけど、お茶の水の幼稚園の遊戯室を会場としてね、第一回の保育学会を開いたわけです。その時は、もう、日本保育学会という名前であったと思います。わずか五、六人が研究発表したんです。その後で集まって、日本保育学会を設立しなきゃならんということで、全員に賛成してもらって、ですから昭和二十三年十一月二十三日が、発足の日なんです。

立川　現場の研究を掬いあげよう、ということでしたね。

山下　はい。前の保育問題研究会の時もそうだったんですけど、現場の保育者と私達研究者が両方いっしょになって研究しなければ、具体的な保育の問題が科学的に進歩しないんだから、ということで現場の人を入れたんです。ただ最初は学会ということで、学者が発表しなければというので、私どもが新聞に発表したりして、そのうち現場の人を引き入れていって、今では半分ぐらいは現場の人にようやくなったかな。

立川　先生、会長になられて何年になります？

山下　倉橋先生が亡くなったのが昭和三十年だから、三十年の五月の大会の時から会長ですから、今年でもう二十六年なんです。家内が申しますには、日本医師会の武見会長が二十何年とかいってるけど、武見会長より私の方が会長として長いって(笑)

立川　激動の時代を生きてこられて、戦時態勢と子どもの研究とのジレンマはなかったのでしょうか。

山下　おおいにありましたよ。当時は、カモフラージュをしなければ、子どものことはやれなかったんです。それに関することで、私、苦い経験があるんです。情報局というものがあって、そこで出版物の紙の配給を統制していたんです。私は、小学館の絵本の顧問みたいなことをやっていて、ある絵本をつくらせたんです。子どもの身の周りにある物を簡単に描いてもらう、後になって売り出したのは、ブルーナーの『子どもがはじめて出会う絵本』ですが、ああいうものを私はつくりたかった。でも日本

の絵本出版社はだめなんですね。それで『お道具』という絵本をつくらせたんです。それは結局、鍋釜なんかが描いてあるんですが、編集者は、こんなものが幼児の絵本になるんですかというわけです。私はおおいになるんだといって。ブルーナーみたいに一ページに一つパカンと描かせたいんだけれどできなくて、いろいろと並べたら、その中に兵器がないじゃないかといわれてね、兵器なんか入れさせられて、それをやらなければ紙をやらない、といわれたんです。私はそういうことを経てきて、ある程度カモフラージュしなければならなかったんですけど、しかし、底を流れているものはね、子どもを愛するという……、私は、子どもを愛することでは世界中の誰にも負けないんだから、といつも公言しているんです。

立川　城戸先生が捕われて……。

山下　ええ、あの頃はね、名簿があって、次には私が引っぱられるところだったのを、終戦になったんです。

立川　ほんとうに紙一重のところだったんですね。先生は、巷に飛び出してらして、おかあさま方や保育者との研究会をお持ちになった、それで環境の問題にお気付きになったこととつながるんですね。

山下　ええ、その点では私は、城戸先生の影響が大きかったと思います。先生がそういう場を作って下さって、私を引っぱり出して、やれっていわれたんです。

立川　社会ということを、とても大事になさったようですね。

山下　ええ、社会性の問題ですね。これは、フレーベル館から出した、長田先生と荘司先生と私の鼎談を記録した『日本の幼児教育』という本があるんです。そこでお話ししたら、長田先生がそれはすばらしいことだなとおっしゃって、当時社会性なんていうのはね、社会という言葉を使っただけで、文部省から文句をいわれましたからね。

保育にのぞむもの

立川　最後に現在の幼児教育を御覧になって、今後、後輩に託されるお言葉がありましたら、教えていただければと思います。

山下　ええ、今まで話したような正しいレールの上に、幼児教育がのっかってくれるようにということね。それから、「保育」という言葉ね、これは非常に大事な言葉なんでね、「幼児教育」ではなくて「保育」といいたい。「保育学概説」という私の著書の中に、私は「保育の意義」ということを書いていてね、いたわりの心、子どもを可愛がる心、そういう心で接していかなくてはいけないんだと。教育要領に変わった時も、教育であると真正面から切り込むのは、幼児を育てる心じゃないと。いたわりながら、面倒を見てやりながら、優しく育ててゆくのが保育なんだと、いつもいってるんです。倉橋先生も、そういうお気持だったと思うんです。それからもう一つ、私は随分苦労もしてきましたけど、常に新しいものをつくるということをさせてもらった、これは大変うれしいことなんです。愛育研究所を創る時にその仕度をさせてもら

った、それから幼稚園を三つ創らせてもらった。最初に創ったのは今の東京文化短大の幼稚園（当時は東京経堂幼稚園）それから愛育幼稚園、東京家政大学附属のみどりヶ丘幼稚園がその次なんです。それぞれ初代園長を務めさせてもらって、しかも実際に保育にあたって下さる方々が、ほんとうにみんないい人に恵まれて幸せだったと思います。それから東京家政大学の児童学科を創って、初代学科長をやったんです。倉橋先生がお茶大の児童学科を創り始めていて、それを基にして家政大の児童学科を創りました。

立川　もう一つ、先生に幼稚園と保育所の一元化の問題について、お言葉をいたたければと思ったんですが。

山下　結局その問題を解決するには、文部省、厚生省という二元にしないで、子どものことを扱う児童省というのを、一つつくって教育も福祉も全部やるという、いわばソビエトみたいな、そういうものにしなきゃだめだという主張を、昔からやっているんですけどね。それを福祉の面から書いた抜きずりがありますから、持ってきましょう。（抜きずりを持ってらっしゃる）

そこで、編集部は、山下先生の児童福祉に対する考え方の一端を読者に知ってもらうため、児童福祉への提言と題する、論文のむすびの部分をここに掲載しておきたいと考えます。

「わたくしは、児童に関連する問題は、教育も福祉も含めたすべての問題を処理し、増進し、子どもの幸せを進めるために、すべてを統合した児童省とでもいうべき省を設けられるべきであることを、すでに四〇年も前に或る論文で提唱した。

わたくしはこのことをここにもう一度くり返して提唱したい。外国にはいくらでも例のあることであって、決して突飛な提言ではないと、わたくしは信じる。また、すべての児童の問題のために、その科学的基礎を確実なものとするように、国立の児童研究所が設けられなければならない。現在ある国立教育研究所、精神衛生研究所、特殊教育研究所の如きは、統合拡大され、児童省の管轄下に入るべきである。

さらに、アメリカの先例に見るように、児童問題について全頭脳を結集した会議、すなわち White House Conference のようなものが、少なくとも三年か五年に一度くらい総理大臣によって招集され、教育および福祉のすべての面において、児童の生活と成長が幸せになる為の基礎づくりを論ずる場が設けられ、これが国立研究所の研究の上にも、またすでに明らかになっていることは、教育と福祉の上にも反映するようにありたいと願う。」

ダブルの背広にネクタイという正装でお迎えくださった先生に、インタビューアーとして、これから先生の内面をどの位感じとって、お人柄や御業績を読者に御紹介できるか心配になりました。

しかしインタビューがすすむにしたがい先生は、一言、一言誠実に、御自分の気持を私共に伝えてくださろうと努めてくださり、先生の子ども研究の深さはさることながら、何時も遠方から先生を見ていた私共にとって、先生のお人柄の温かさに接することのできるよい機会でした。（立川記）

（記録　森下みさ子）